平成２４年度

第３回　鶴 岡 地 域 審 議 会

会　議　録　（概　要）

期 日 ： 平成２４年１０月２５日（木）

場 所 ： 鶴岡市役所　大会議室

５０２会議室

平成２４年度 第３回鶴岡地域審議会会議録（概要）

○ 日　時　　平成２４年１０月２５日（木）　午後１時３０分～

○ 場　所　　鶴岡市役所　６階　大会議室
　　５階　５０２会議室

○ 出席委員（五十音順）

五十嵐吉右衛門、伊藤俊昭、稲泉眞彦、奥山春名、今野毅、齋藤春子、菅原衛、竹内峰子、竹田理英、田村勇次、茅野進、早坂剛、本間仁一、三浦惇、山田登

○ 欠席委員（五十音順）

後藤輝夫、佐藤東一、菅隆、丸山絢子、若木敬一

○ 市側出席職員

企画部次長（兼）地域振興課長 三浦総一郎、地域振興課長補佐 武田壮一、
地域振興課地域振興専門員 三浦裕美、地域振興課主任 前田哲佳

１　開　　会　（午後１時３０分）　分科会毎
２　協議事項
　（１）各分科会の協議テーマについて
　（２）その他
３　全体会
　（１）分科会毎での協議内容報告
　（２）その他
４　その他
５　閉　　会

１　開　　会　分科会毎（午後１時３０分）
地域コミュニティ分科会進行：三浦裕美地域振興専門員
産業経済分科会進行　　：三浦総一郎地域振興課長
２　協　　議（地域コミュニティ分科会座長：山田登分科会長）
（産業経済分科会座長　　：今野毅分科会長）

（１）分科会の協議テーマについて

＜地域コミュニティ分科会＞

○ **山田登分科会長**　分科会のテーマについて、どのように考えたらいいのかということが今日の大きい課題でございます。参考資料１は、前回委員の皆様方からのご発言の要点をまとめたものです。また、参考資料２は、人口が最近減少しているということの課題から、その実態が分かるような資料が出ております。世帯数は若干増えているのに、人口が減っているということは、一世帯の家族数が非常に少なくなってきている。個別化が進んでいる。仕事の関係で親と同居が出来ず、アパート生活の方も増えているのかと思われます。資料を参考にしながらでも、何でもいいと思いますので、テーマについて今後掘り下げていきたいことや一緒に考えていきたいことなど、コミュニティ分科会に関わることでご発言いただけたらと思います。

○ **本間仁一委員**　前回の審議会で話されたことがこの資料１に出ていますので、それ以外で、今自治会や自治振興会、それから区長会や住民会といろいろある中で、たぶん市内のほうも同じだと思いますが、郊外地では、少子高齢化、それから市の中心部への家屋・家族の移転、高齢者が自分たちでは生活できなくなり、若い方のところに移るということで、いわゆる郊外地の集落の空洞化、過疎化と言いますか、家が非常に少なくなってきているというような状況が１つあります。それに伴って空き家、空き地の問題も大きく取り上げていかざるを得ないのかなと思います。集落での空き家がかなり増えている関係で、各自治会ではその対策について非常に手を焼いております。それは、空き家と言えども個人の資産であるため、勝手に中に入ることは出来ないということがあります。危険な状態であっても中に入って直すことが出来ない。草がぼうぼうとなり虫がいっぱい発生したり、あるいは蜂の巣があっても取れないなど空き家についての問題がいろいろあります。郊外地の方では困っている状況があるということも、ぜひ皆さんから理解していただきたいと思っていたところです。

○ **山田登分科会長**　少子高齢化そして家族の移転に伴って空き家が増えているということでした。ただ今は郊外地でのお話でしたが、市内の中でも空洞化しております。第二学区でランドバンクの指定地域がございます。ランドバンクと空き家対策についての研究ということで１０年計画でその解決を図っていきたいということで取組んでいる地域もございます。なかなかこれも大きい問題だと思います。それから、私の親戚の中には鶴岡から離れてしまい、お墓と空き家が残っているという状況があります。将来、相談して、どうするのかということを考えていかなければならないと思っています。空き家だけでなくお墓の問題もかなりあるようです。

○ 茅野進委員　この審議会について、実態や課題を出して、手立て、誰がどのようにするのかまで出していくのか、今後の進め方について教えてください。それから、私としては地域コミュニティの活性化という一つのテーマが前年度出ていましたので、コミュニティの活性化はどう図ればいいのかということを大きなテーマにすれば、各層の問題が出てくるのではないかと思っております。課題として、住民同士の話し合う場が今非常に少なくなっていますので、話し合いの場をどのようにつくればいいかというのが一つあると思います。その切り口として、例えば、防災や私のように福祉の立場からの住民の支え合い活動、健全育成とか、何でもいいと思いますが、何かポイントを絞って、今回のポイントはここ、次回はこのポイントと絞っていったらいいのではないかと思っております。二番目として活性化のために各団体・組織の連携をどのように図ればいいかということがあります。縦割行政とは違い、住民同士は横の連携が一番大事ですから、その連携をどう図っていけばいいのかということが大きい柱になるのではないかと思います。三番目は近隣の絆づくりをどうつくっていくかがまちづくり、コミュニティの基本でないかと思っております。市で福祉計画、社協で福祉活動計画を作りましたが、そこで五層エリアとして近隣の支え合い活動を取り上げていますので、近隣の支え合い活動はどうあればいいのか、どうすればいいのかということを挙げさせていただきたいと思います。それから四番目として、組織の活性化ではリーダーをどう育てるか。私は団塊の世代が退職して町の方に入ってくるだろうと予想しておりましたが、趣味や生きがいづくりがあるようで、なかなかまちづくりのリーダーにはなっていただけないという大きな課題がありますので、リーダーの養成をどう図ればいいのかも課題だと思っております。

○ 三浦裕美地域振興専門員　前回、市長に提言書を提出しましたが、今回も、皆さんのご任期内に提言をしたいと思います。まず、課題や問題点の洗い出しをしながら、議論を積み上げていき、どのようにすれば課題や問題点が解決出来るのかということで、それを提言とさせていただきたいと思います。市長への提言に向けて、こういう問題があり、解決をするための策、意見、提案と考えております。まだスタートしたばかりですので、地域コミュニティに関する現状・問題点、皆さんが日頃感じていること、所属の団体を踏まえても踏まえなくても構いませんので、出していただいてまとめていければと思っております。積み上げていくイメージです。最初からテーマを絞るのもいいもですが、いろいろ出していきながら二つ三つ絞り込んでいければと考えております。

○ 山田登分科会長　あまり絞らないで一人ずつの考えを出してもらいながら、その中から徐々に絞っていくということです。茅野委員からはコミュニティの活性化に伴って四つの視点を出していただきました。

○ 竹内峰子委員　今お二方からのお話しで、市街地も郊外地もないのかなと思いながら、大体のところを出していただいたと思いましたが、より具体的にとなると皆二の足を踏んでいるのが実情なのかと思いました。最近、三瀬だけではないのですが、社協のモデル事業として「おだがいさまのまちづくり」を三瀬もモデルにして始めたばかりです。隣組単位での見守り活動とそれの支援ですが、支援が必要な方、例えば、ごみ出しをして欲しい、雪掃きをして欲しいといったことに、隣近所で出来る人が行ってお手伝いをしてごみを出してくれ

るとかする。今まだ始まったばかりなので、モデルになってもらった方に、今どういうアドバイス、支援が出来るのかをしています。そういう中で全部いま言われたものに対してのおだがいさまということでの、隣近所で支えあうことが一番なのかと、この頃ふと思いながら、ある地域ですが、やはり日中一人でいると、薬を三食後に飲まなければならないのに飲まないでいる。そこで隣の人が薬を飲んだかと声を掛けることではっと気付く。その話しを聞いてですが、三瀬の中でも配食があります。配食のお昼を運んでいたらば、朝のご飯がそのままになっていたことで、おかしいということがありました。やはりきめ細かい中での地域コミュニティというのが必要なのかと思います。今までいろんなことはしてきたけれど、実際にどこまでやれたのかと思います。三瀬でも一人暮らしの方が６０人程おりまして、市全体から見ても意外と多いなと思っていますが、そのような方たちを、例えばディサービスがあるからそれを使えばいいのではなくて、地域の中で支え合うことが、これからの時代必要なのかと考えていたところでした。

○ 稲泉眞彦委員　参考資料２で、平成１７年から２４年まで毎年１０００人ずつ減っています。合併の時に十何年後かには鶴岡の人口も８万人位まで減るという話があり、これはあらゆる面で問題になっていくので、市町村合併をするのだという話でした。今皆さんの意見の中にも、過疎化や人口減少の問題に関わることが出ましたが、老人が多い都市であれば自然減少は仕方ありせんが、毎年１０００人という数字について、もし分かれば機会があった時でもいいですので、自然減少と社会減少について、例えば子どもの進学でどのぐらい減っているのかなどお願いします。関連して、先ほど郊外の土地から市内に移ってくるというのが、非常に多いとのことでしたが、先日山に登るため行き帰りバスを使って田麦俣に行ってきました。朝のバスには１０人位乗客がいたのですが、その内の４人位が山作業用のかごを背負い、何か農具らしきものを持った女性の高齢者でした。夕方の帰りのバスにその方達とまた一緒になりましたので、今日はどのような用事で来たのか聞いてみました。すると田麦俣から市内のほうに、家族で移転したのだけれども、自分の土地があるので、毎日ではないが畑を耕すことをしていて、大変楽しいとのことでした。と同時に息子さんが県外に就職して、それを契機に県外に一家で出ていくという方も多分かなりの数があり、そのような状況が現実に朝日に限らずどこにでもあるのではないか。市内も同じように過疎化で空き地、空き家が町の真ん中にもあり、ある意味空が広くなったけれども、そこには子どもがいないという状態が作り出されてきています。

　そこで意見ですが、戦後を考えた時、鶴岡の発展がずっと続いてこれたのは、東京などから企業が地方に来たことにより、働く場が確保され人口も増えたことで、経済も支えられたからだと思います。私が以前、教職に就いていた時に東大の先生が調査に参りました。それは、戦前の学籍簿から関東に出た人を追跡するという内容で、県とも話をして協力し、結果を報告いただきましたが、それは戦前の当時の工業高校で言えば、農家を主体に次男、三男が技術者となり東京に出て一生懸命働き、それが認められ、東京の企業が拡大しようとした時に、どこに拠点を持っていくかとなった場合、やはり優秀な人材がいる場所、教育がしっかりした場所、それから人の気持ちが安定したところに持ってくという結論に立ち、この鶴岡に多くの子会社が移転してきて、働く場を確保してきたというが結論ですということでした。これは論文になったか、本として出版されたのか確認はしていませんが、関わった私どもは一部ですが頂きました。ここから先は同じようなことは望めないのではないか。企業は

鶴岡ではなく海外の、私が在職している頃は北京などの進出企業を何回か見ましたが、もっと人件費の安いところに移っているという状態を考えますと、大変厳しいことは明白です。そうすると、今私達として経済にも関わりますが、働く場がこの地で今後も確保できるのか、あるいは確保するためにどうするかということが、人口問題から少子化のあらゆるものの根本になっているではないかということを強く感じます。

○ 山田登分科会長　人口が減少しているところの原因は何かという辺りを突き止めていくと働く場所など様々な課題が出てくるのでないかと思います。この点についても掘り下げていく必要はあるとは思います。課題として一つ捉えていければと思います。

○ 齋藤春子委員　資料１の内容は課題ですが、それを一つずつ解決していても、逆に住んで良かったという町にはならないと思います。地域で最も大事なものは何かということを、もう一回考え直してみたらどうでしょうか。コミュニティの役割は、地域で生れて亡くなるまで、住んでよかった町にするということだと思います。例えば、年寄りが多くても、こんな楽しいことが出来るのだということで、今回は、年寄りが中心の催しとしてセッティングする。そうすることで次々と住民が集まれるような体制がつくっていけるのではないかと思います。それは、楽しいことだけではないかも知れません。それから、この間自治会長と話で、青年層や若い人からの意見だけでは、地域づくりにならないと言いました。意見を出すのは大変だろうけど、保育園の子どもや小学校、中学校、高校、青年層や若い夫婦が集まって、みんなで言えるような雰囲気の集まりなどが出来ないのかと言ったら驚かれました。それは、住民がみんな集まれるような体制を考えてみようということです。例えば、踊りをやっている方がいれば、小学校、中学校関係なく踊っている方はみんな集まれとか、青年の人たちの発表の場で、いろいろな発表が出てきますよといって住民を巻き込む。あるいは必ずコミセンに集まるのではなく、地域全体で取り組む野外活動があってもいいのでないかというように、階層に関係なく皆を巻き込んだ形で繋がりを太くしていく。問題点を一つ解決してもまた別の問題が残る。この解決が先、これが二番目という順序はないのかと思いました。みんなが楽しい地域であるためには、どうしたらいいのか考えてみてはどうかと思っています。それから、婦人団体の集いの相談をした時ですが、婦人団体も高齢などの理由で５団体くらいしか残らなくなった中で、会長ばかり集まらないで、副会長も集めて考えた方いいのではと言いまして、３人出たところもありますが、一つ団体が少なくなっても昨年同様に計画しました。自分達で動ける体制をつくっていく。それは地域のコミュニティの中でのコミュニケーションだと思います。実践してどうのというのでなくて、楽しいこと、みんなが出なければならないこと、そういう会をつくっていくことも一つの方法なのかとも思いました。しかも年代に関係なく、あるいは女性だけの会というのがあってもいいのではないかと思ったりもします。それをきっかけにして、地域の人達のコミュニケーションが上手くいき始めたら、段々隣組同士の付き合いなどが実ってくるのではないかと考えました。

○ 山田登分科会長　住んでよかったというコミュニティになるように、若い方からお年寄りまで地域の方を巻き込んだ楽しいことをやっていくということを仕組んでいく。それがいろいろな面に力として発揮されてくる。地域の力を生み出すということになるのではないかということでございます。

○ 伊藤俊昭委員　私は消防の立場で出席しておりますので消防のことを申しますと、ご存知のとおり消防は今全体が一枚岩になりましたので、全体の取りまとめや進め方で今かなり頭がいっぱいなのですが、これは鶴岡地域の審議会だということで、もう２、３年はこのような形で開催するのが、合併時の取り決めという話でしたが、あまり風呂敷を広げすぎていろんなことしようとしても、なかなか出来ないと思いますので、まず一つ何か絞って積み上げていく形に持っていかないと、我々がこの任期内の１年２年で４つも５つもの課題に何か解決できること難しいのではないかと思います。ただ私は立場上、すごくありがたく思うようになったことは、地域の自主防災会といいますか、婦人防火クラブそれから消防団、自治振興会も一緒になって各防災訓練をやっていただけるようになったということは、３．１１以降特にそうですが、鶴岡市の防災訓練は各コミュニティ単位で進めていて、相当のところが実施しています。来年は第四学区が担当になっていますが、鶴岡が県の防災訓練に当たっていますので、多分小真木原あたりを会場になるのかと思います。それから、私は湯田川ですが、防災と高齢者の関係では、要介護者それから一人暮らしや二人暮らし、８０歳以上の二人暮らしの老人の方に非常時に、どのような形であれば、みんなを救うことが出来るのか、今知恵を絞りながら考えています。ただ、老人の方もかなり自負心もありますので、自分は大丈夫だという方とかいろいろな場合がありますので、一人に対して一人が介護、救護するという形でなくて、その人が鶴岡や旅行に行っている場合もありますから、４，５人ぐらいの班で、何かあった時にこうしようという形に持っていこうという話合いなどもしているのです。できれば私は防災関係ですので、地域と一緒になったこの防災のあり方というのを少しやっていただけたらありがたいと思いますが、まずは、皆さんの考え方で、その都度意見は言わせていただきますが、私自身はこのように感じでおります。

○ 山田登分科会長　消防関係で、防災について話合いが出来ればということです。

○ 竹田理英委員　資料２を見ると世帯数は増えているのですが人口が減っている。少子高齢化というのは鶴岡市だけでなく他のところでも言われていて、やはりそれは危惧することで、市にとってもまた鶴岡だけでなく酒田でも、それはよくないことだということは分かるのですが、それをどこで人口減少を止めないように、または転入を多くするようにするのか。例えば、私が起業して１００人の雇用を生み出したり、また、ここにいる皆さんが雇用を生み出すようにすれば、鶴岡市で雇用を増やせるということが出来ますが、現実的は出来ないこともあり、やはりこの人口減が止められるわけは、私は今のところないと思います。例えば、ルネサスのことでも、昨年や一昨年の今頃、このようなことになるとは誰も考えていなかったわけです。今の世の中どうなるか先のことは分からない。もしかしたら大きな企業が鶴岡に誘致によってやって来るかもしれない。これからは、やはり役所や行政は最悪の状態をいつも考えながらやっていかなければならないのではないかと常々考えています。消費税１０％になるとかという中で、いずれ年金生活になった時にこの市で暮らしていけるのだろうかと思います。人口が減るといろいろな公共料金も上がってくるかと思います。やはり住んでいて、お金だけではないのですが、自然もあり、とても風光明媚で人もいい。大好きなところではありますが、２０代、３０代、４０代の人たちが、この先ここを出ていった時に、不安にならないようなＰＲの仕方ということを、もっともっと進めていただいき、不安にならないようにしていただきたいと思います。年金にも格差があるということを聞きました。

厚生年金や年金が高い方はいいわけですが、国民年金だけではやはり暮らしていけなくて生活保護に頼るしかないということもあるようなので、行政はしっかり分かってはいるとは思いますが、そういうことを踏まえながら、現実を見ながらこれから先、この鶴岡市をどのようにしていったらいいのかということで、不安要素を少しでもなくせるような提言ができたらいいのではないかと感じます。

○ 菅原衛委員　日頃考えていたことを少しお話しさせていただくと、成人になる子どもがおりますが、小、中学校、高校と部活を中心に親の会の会長をしたことと、その前はＪＣの理事長として、景気が悪くなり就職率も悪いということで、稲泉委員が校長先生でいらっしゃった時１００％就職という状態の中、冷静に状況を見ていましたが、年々景気を中心としていろいろ状況が悪化している中で、職というのが多分効果的なことでしょうが、子育てをしながら思ったことがあります。それは中学校の教育についてです。地域コミュニティといいますと、小学校、または、もっと小さいエリアのことを指すのでしょうが、中学校のエリアに置き換えた時に、思った以上に中学生は大変な時期で、初めての受験で将来が決まる子もいらっしゃいます。それにしては、高校の数が人口も含めて少ないのですが、選択肢が少ないと思います。そういう状況と、中学生は難しい年代というのもあるかも知れませんが、部活とか何かきっかけがあれば集まったりするのでしょうが、なかなかそういうテーマだったり場がないのかと思います。逆に小学校ですと、もっと小さいと子ども会とかありますが、お祭りを中心にして年配の方までずっと、当屋という制度を含めて、意外とまとまりがあり、同じ楽しみ、苦労を共有しているので、感心するくらいのまとまりがあります。そこで、中学校区のエリアのコミュニティに力を入れられないのかと思っておりました。

○ 山田登分科会長　教育についても地域の方々はかなり関心を持っていると思います。第二学区での市長と語る会で、教育についていろいろ質問が出たのですが、時間が限られている中で教育部長さんから回答をいただきました。一番は城下町ということで、鶴岡は教育について江戸時代頃から非常に高いレベルの教育があったのではないかと思います。確かに戦前の鶴岡中学校から帝大に入る方々がかなりおりました。そういう点から見ると、最近はどうなのかということから始まり、全国的にいじめなどもあることからも、鶴岡はいじめに対してどうなのか。もっと地域も一体になって子どもと関わるようなことがあってもいいのではないかなど、町内会長の集まりの中では様々な議論がされ白熱しましたが、やはり教育問題は語りつくせないほど課題があるのではないかと思います。ひと通り皆さんからご発言いただきましたが、これだけでいいのかどうか、もっとあるのかも知れませんので、さらにテーマになり得るもの、しかもみんなで市民を巻き込んで取組んでいけるようなものを設定できればと思います。

　茅野委員から出ましたコミュニティの活性化ということで、いろいろな団体がありますので、そういった各団体との横の連携を大事にしていく、それから絆を大事にということでは、竹内委員からありました「おだがいさまのまちづくり」とも関係してくるのではないかと思います。午前中葬式に参列してきましたが、弔辞の中に「おだがいさまのまちづくり」とありました。やはり関わりあって、いろんなことを町のためにやっていただきまして有り難うございましたという内容でした。そういう絆を大事にしていく、支援体制をどこかに求めるというよりも、隣近所の人で助け合いをしていく風土をつくっていくことが、コミュニティ

には大事なのではないかと思います。

齋藤委員から、住んで良かったという地域、そしてみんなが一緒に取り組んでいくという風土を作っていくということが、鶴岡の城下町としての伝統を守っていく筋道にもなり、テーマのひとつになるかと思います。それから、消防関係で防災というこれも大事だと思います。私の町内のお父さん方の中にも大変積極的な方がおりまして、火事が出た場合は消防自動車が来る前に我々で水をはじいて消した方がいいのではないかということを提案して、ホースなどを購入し設備を整えたらどうかというような発言もありました。第２学区の町内会長の集まりの時に、町内の自主防災で初期消火は消火器でなくホースで水をはじいて消すような体制をつくりたいと言いましたら、そんな危ないことはやめたほうがいい。一番大事なのは命だからまず逃げることであり、消火は町内ではやるべきではないと言われたのですが、やはり消防自動車が来るまでの間、火を消せるものであれば消したいという考えの方もおります。そのようなことも含めて、防災のあり方は考えていかなければならないと思います。また講師の方からいろいろ話を聞いた時ですが、訓練だけではなく、事前にどういう災害があるかという学習も防災につながるので、学習の機会もつくるということが大事だと言っておりました。防災についてもいろいろな団体での防災があると思いますが、災害が起きる前のいろいろな取り組み、災害が起きた時の実際の混乱している中での取り組み、そういったことが収まって一日目、二日目、一週間、一ヶ月という、大災害の場合は、長期間に渡って復興に取組まなければならない時の体制づくり、準備、心構えなど様々あるということを教えられた機会がございました。したがって、防災や消防活動などをテーマにすると、かなり膨大なものになっていく面もあるかと思います。それから、人口減少に伴ってこれからどういう世の中になっていくのか。昔のように人口を増やすという取り組みだけでいいのかどうか。人口が少なくなっても幸せな豊かな生活が出来るような工夫や改善といったことに、目を向けることもあっていいのではないか。人口が少なくなって大変なのではなく、その中で幸せな生活ができる取り組みを明らかにしていく方法を考えていくこともあるのではないかと思いますが、さらにご意見をお願いします。

○ 茅野進委員　齋藤委員のお話しにありましたが、地域で何かする場合に、リーダーやコーディネートをする人をどう育てるか、立場をつくってあげるかが大事だと思います。第５学区では１５町内会のうち、６つは福祉防災マップを作っていますが残りはまだです。リーダーとなる人たちの考えた方で違ってくるので、どう考えるかを育てないと、実のあるものならないのではないかと思います。伊藤委員のお話で、湯田川の場合、一人に対して３，４人でやっていこうということは素晴らしいと思いました。私達は２人ずつでやりましょうということを考えて取組んでいます。福祉防災マップをどう活用するかということで、鶴岡高専の澤先生に来ていただいたり、小堅にも先日お願いしながら、今一生懸命取組んでいることであります。自主防災があるから防災マップ、福祉マップは福祉で支えるということと、どう連携するかというのが非常に大きい問題です。横の連携をどう図るかということから言うと、やはり話し合う場が大事だと思っていました。

○ 伊藤俊昭委員　最初から一緒になってマップを作ります。福祉だけでなく自主防と社協のメンバーと一緒になって作ることにしたのです。作ってからどうするのではなくて、作る前の段階から別々の会が一緒なって一つになって作りました。

○ 茅野進委員　湯田川のように一つだとできるのかと思いますが、１５町内を学区でみなやりましょうとなると、なかなか難しいです。

○ 齋藤春子委員　私は防災でも福祉でもそれをきっかけに地域を興していくことは、必ず出来ると思います。防災訓練だけが防災ではないのです。私は日赤の奉仕団に入っていることから、阪神大震災の後に考えたのは、一般の家庭では何が出来るかということで、まず逃げ出す時に背負って逃げるものがあるか。私達の婦人会では５０人くらい集まりリュックを背負って、中に何が入っているかから始めました。私が目をつけたのは笛です。助けてくださいと吹く笛、助けに来ましたよという笛。笛も常備の中に入っているからですが、日赤の奉仕団の人からよく笛に目をつけたと言われましたが、そんなきっかけで出来ます。地域で防災に取組むとしたら、防災の講演もそうですし、初期消化の訓練のために地域で消火器がどこにあるかについて話しをすれば、皆が乗ってくると思います。阪神大震災の後に防災計画を作る時、私が委員長をしたのですが、防災でまちづくりと言いましたら、そのように言われると絶対忘れないと言われたことがありました。それも防災だと思います。それから、資料１にありますが、昔は地域の年寄りたちが、自分の家の子ども以外でも怒ったりしましたが、今は怒る人がいない。学校の先生に子どもの躾はどこでするのか聞いたことがありましたが、学校ではしていないと聞いて、そうなのかと思いました。語弊があるかも知れませんが、家庭でなくても地域で出来ることはあります。私が書道教室をしている中での経験ですが、子どもの練習に付き添ってきたお母さんで、なかなか書き始めないことで子どもを叱っていたので、私はお母さんに叱るだけが子どもを育てるものではない。叱らなければならない時はあるが、しょっちゅう叱るのはよくないので、もう少しその辺を考えたらどうだろうかと率直に言いました。叱らなくても子どもは育つのかと聞かれたので、叱らないほうが育つよと言ったことがあります。地域の中でも教育も出来るのではないかというお話が出ましたが、私は口で言うから教育ではなく、やはり周りで支えていくことも教育の一つで、子ども達が育っていくのだと思いました。やれば出来るのだと思っています。

○ 山田登分科会長　やはり、一つには人口減少に伴って起こる諸問題でしょうか。

○ 竹田理英委員　今のお話を聞いてですが、私が住んでいるところは鶴岡市でも新興住宅街ですので、同じ年代の方々が家を建てて住んでいて、皆さん働きに出ていて日中誰もいない。アパートとかありますが、ここ１０年くらいの傾向ですが、親御さんお一人にお子さんという世帯があるようです。町内の防災訓練とかあっても出席率がよくなくて、逆にいいのは夏祭りと草むしりくらいです。老人会もありますが６５歳からです。誰も６５歳では年寄りだと思っていませんし、８０歳ぐらいのお年寄りがそんなにいません。お年寄りの方は一人世帯になると一人では危ないということで、これは知り合いの方の話ですが、有料の老人ホームに最近入られている方がいて、入って良かったもう安心だということでした。すぐ入れるわけではないということもあるようです。町内では夜７時以降にならないと電気が点つかない家が結構あります。皆さん働いていて、やはり子どもを大学まで進学させるとなれば共働きが多くなるのだと思います。働くことはとてもいいことなのですが、市内とその郊外地のギャップということは、この鶴岡でもあるのだということをすごく感じました。

○ **茅野進委員**　少子高齢化時代ですから、子どもの少ない問題と、超高齢化の二つの面があるのではないかと思いました。見守り支え合い活動、みんなで住みよいまちをつくるにはどうすればいいのかということに絞られてくるのでないかと思います。

○ **竹内峰子委員**　私もそのとおりだと思います。少子高齢化の中で、今言われたように一人親家庭が増えてきたと思います。地域柄のことも考えながらですが、そういった意味でも支えてあげなければならない。その辺が一番の大事なことか思います。先ほども言いましたが、高齢者一人暮らしで、鶴岡でも一人静かに亡くなった方がおられ、早く発見されればよいのですが、長く発見できなかった方だとか、隣近所にいながらも、夜な夜な電気が点いていると気付きながらも、おかしいというのに気付くまでの時間が何日もあるとか、やはりそれだけさっき言ったとおり、近所の絆、おかしいと思っても今晩はと言って入っていく家が無いとか、そういうことで昔から見ると、お茶飲みという形で、いろいろなお家に行ってお茶飲んでという、その会話すらも今薄くなってきたのかと感じます。この前も隣組の方々が集まっていろいろな話しになった時に、お茶飲みというのが今全然ないという話が出ました。若いお母さんが帰ってくると皆帰るとか、それだけ希薄になってきたのかなあという人間関係が、それをもっと大事にするには、本当に地域でおだがいさまのまちということを再度興していかないといけないのかということから見れば、高齢者に対する対策。それから少子化に対する対策。家族が多い中で育つのではなく、母親と子どもの育ちの中で、今まで伝承されてきたものもが続かないということがあるので、やはり鶴岡の良さをこれからの子どもたちに伝えていくためには、地域の大人の力が必要なのかと感じました。

○ **稲泉眞彦委員**　どなたかからもありましたが短時間の中で全ては出来ない。そこで何を取り上げるのかと考えた時に、市民が本当に幸せかという観点に立ってみてはどうかということです。今のところに４０何年住み続けて、周りを見ると人口は大幅に減りました。ただ、人口が少なくなったから悪いのかと考えると、住んでいては住みやすくなったと思います。町はきれいになり広々していますが、子どもがいなくなっている。それでも何代にも渡って住み続けている人達や町を見て思うことは、今も子どもがいる家というものは、親もその子どもも一家で町内会に積極的に関わってきたような人たちが圧倒的に多いということです。このことをまず一つ考えます。

　それから、私の親戚で、８０歳後半から９０歳代になった方々おり、その方たちから見れば私は次の世代になりますが、事前に葬式などの事について自分の時は頼むと言われたりします。その中で相談されたり、いろいろ話をする中で、自分は幸せではなかったということを言う方がいて、それは、子どもがそばにいないという理由でした。子どもはかつて一生懸命勉強して、東京などの大学に行き一流の企業で頑張ってきた団塊の世代のような人たちですから、こちらに帰ることは出来ない。また、こちらの事情も知らない。例えば、親が倒れて、施設に入れようとしても簡単ではありません。その場合は方法など手ほどきをしてきましたが、親のところへ帰ってきて面倒を見ながら、そういう知識を得なければ、親が倒れた時では遅いのだよとも言ってきました。世間から見れば幸せだと思われても、そうではなかったということを考えた時に、幸せは何なのかということで、やはり地域に誇りを持っているということが、この地域で生活することは大変なことかも知れないけれども、働く場を得て、実家で幸せに暮らしていることを、もっと大事にしていく必要があるのではないかと思

います。そういう意味で、コミュニティの活性化の中で、子ども達に鶴岡の文化をどう伝えていくのかという視点が一つあってはいいのではないかと思います。それがイコール幸せになるとは言いませんが、市民の幸せの観点というのはそのようなところにあるのではないかと思います。

先ほど分科会長がお墓の問題などを挙げていましたが、お墓をつくっても拝む人がいなくなったり、５０年後には誰もいないかも知れないので、親戚には一つのお墓にしたらどうかという提案をしています。お寺さんからもいろいろアドバイスをいただいていますが、お寺さんも無縁墓の増えてきている状態だと言っておりました。これからは、そういうことが一層進んでいくのかも知れません。それは、学校でも、長男と長女、また二人目まではいても、三人目の子どもはなかなかいません。少なくとも高校ではそうでした。それから、共稼ぎの話がありましたが、山形県は共稼ぎ率が全国１，２位で、皆が一生懸命努力して幸せをつくっていくわけですが、我々としては子どもをどう育てていくのか。躾もありますが鶴岡の文化を誇りに思うこと。それが今まできちんと伝えられてきたかというと、必ずしもそうではなかったかなという意味でも、コミュニティの活性化の柱の一つとして、鶴岡の文化を子どもに伝えることを提言してみてはどうかと思います。

○ 山田登分科会長　この分科会のテーマはコミュニティの活性化とし、その中にはいろいろな視点があると思いますが、一つの視点として鶴岡の地域文化を子どもたちに伝えていくということが出ました。また、リーダーの育成、絆を大事にするというキーワードは大事にしていかなければならないと思いますし、防災で町をつくるという意識も大事なのではないかと思います。話題が尽きないほど次々ご発言いただきました。事務局でのまとめをお願いします。これを持ちまして分科会を終了いたします。ありがとうございました。

＜産業経済分科会＞

○ 今野毅分科会長　前回の提言は地域の観光などから議論し、いかに人を多く鶴岡に呼ぶためには、どのようにすればよいのかということでしたが、震災以降も含めた社会的な状況、一年に１０００人ずつ人口が減っていくという現実をどう捉え、産業やコミュニティが活力を失うことになるだろうと予想される中で、定住促進、定住化というのはテーマとして大事なことではないかと思い、今回はこの辺を中心に出来ればと思います。このことも含めて、皆さんのお考え、それぞれの立場でも、何でも結構ですから出していただくということで進めたいと思いますので、よろしくお願いします。

初めに私から、ＪＡ鶴岡の組合長、また、この地で農業をやってきた立場として、農業が地場産業であることは十分認識があります。ただ農業にもいろいろ問題があり、担い手不足、主たる従事者の半分くらいが６５歳以上になっている高齢化という現実。輸入という枠組み。社会経済状況のデフレ傾向。それから、庄内空港が出来るまでは庄内島と言われた、大消費地からの遠隔地という条件。そして、春、夏、秋以外は青果物等の生産は向かないという立地。その中で、いかに農業を活性化させていくかを常にテーマとしております。米は遥か昔から主食という位置づけもあり、どうしても米を主体にした農業になる。しかしながら、ＪＡ鶴岡では先人の様々な苦労の中で、砂丘地を活かした農産物の生産に５０年以上も前から取り組みメロンを、そして特産品であるだだちゃ豆に代表される地場産、在来野菜を含めて、２０数年の歴史の中で、地域の特産としてＪＡ鶴岡はメロンやだだちゃ豆を中心として、米の低価格傾向を補完する形で取り組んできました。ＪＡ鶴岡で米の収穫量が一番多かった頃に比べると今は約８割弱です。それから、園芸特産品含めて農産物販売は一番高かった頃より６割位という状況の中で、担い手不足、高齢化があります。ただ、国の政策もありますが規模の拡大などもあるので、一概に担い手が少なくなったという認識は正直持っていません。必ず意欲のある方がいますので、上手く集約されていると思います。それから、中山間地域では規模の拡大や農作業の効率が悪いことなどで、耕作放棄地という活字を目にする場合もあり、なかなか集約が進まない現実もあります。林産特産品も含めて、もっともっと振興すれば、良いもの、美味しいもの、珍しいもの、いわゆる付加価値の高いものがたくさん出来るということも含めれば、私は農業という部分でこの地域ので中心的、あるいは農業というものが地場産業であるという認識は、これからもそんなに変わらないと思います。いかに多くの方々が認識していろいろな産業を興す。六次産業化と絡めて新たに活性化をしていき、地場産業を様々な業種の方と結びつけながら、農業をリンクさせて地場産業を活性化させていく。そこに人を呼び込む可能性があるのではないかと思っているところです。

続いて、早坂会長から商工会議所の会頭として全体を俯瞰したお話し、定住化というテーマについて、あるいは他のテーマがもっとあるのではないかを含めてお願いします。

○ 早坂剛会長　会議所としては、定住人口を増やしていくには雇用の場がなければと思いますので、雇用をいかに安定させていくかということを、一番取り組んでいるところです。この間、東京で講演会を聞いた時に驚いたのですが、２１００年の日本の人口はどれ位になるかというと、講師の方の調査では４８００万人になっているということでした。今１億２０００万人で、山形県に置き換えると約１２０万人ですから１００分の１と考えると４８万人位なりますので、非常に愕然としました。そこで問題になっているのが出生率だというこ

とでした。今の日本の出生率は１．３９。一番出生率がいいのは沖縄。一番低いのは東京。講師の方が、沖縄は通勤に電車もないから、自家用車で大体３０分圏内で通っている。東京は通勤に１時間半や２時間掛けている。住まいは沖縄の方はゆったりとしているが東京だと狭いとか、そういう環境で子どもを産んで育てられるのかということで、結果的に出生率が下がっていったと言ってました。関東圏に日本の人口の３割位を占めることからも、そこで出生率が上がらなければ日本の相対的な人口は増えていかないのではないか。講師の方は出生率を上げるには、地方に住まなければということでした。働く場、学校、官庁などが東京に集中していること自体が日本をだめにしていると言うことで、この人口をいかに地方に分散させられるかが、これからの日本の再生になっていくのだという話でした。

我々の地元、鶴岡をみれば、これだけの自然、環境、食料があり、子どもを育てる環境としては最高だと思います。これに働く場が安定していれば、この地域はよくなっていくと思うのです。まず、何でも東京、大都会に行かないとだめだという感覚を変えていく。地方にいる人達も若者も、自分のところは過疎だとか、何も無いから東京に、大都会に出ようとする価値観を、地方のほうがいいのだという価値観へいかに変えるか。また植えつけるかが定住人口を増やしていく、一番の根本的な解決方法ではないかということを言われました。県の会議所の青年委員会の県大会の時にも、次の世代、また次の世代に、あなた達を含めてしっかり子どもを作って、その次の世代も子どもを増やしていくという施策、考え方を、地方のほうが働きやすく住みやすいのだという地域にしていくのだという目標をもって、皆で頑張っていこうと言いましたが、いかに働く場を安定的に作っていくかということが、農業も観光も小売業、工業関係も然り、いかに企業をもってくるかということが大事になるということで、今後の我々の課題だと思います。ルネサスさんのことが一つの問題になっておりますが、今後どのような形になるのかはありますが、安定した雇用の場を作っていくことが、これから大事なのではないか。それには農業、漁業、林業、いろいろな業種を含めて仕事があるのだということを、是非皆さんと一体となって、やっていかなければならないと今感じているところです。

○ 五十嵐吉右衛門委員　早坂会長から雇用が一番大事でないかという話でしたが、私も常々そういった考えでいます。市全体としては７割が山林を占めているため、総合計画にもありますが、いかにこの資源を今後活用するべきなのか、今後考えなければいけないことは、林業については前回の地域審議会でも、代替エネルギー関係が話題になりましたし、その関係で考えれば雇用の場は確立されるのではないかと考えています。ペレット関係、水力発電、様々なものが考えられますが、今どのようになっているかを掘り下げて考えみる。研修で内陸の代替ペレット工場も見学しました。また、この間の大産業まつりで展示がされていたのですが、米ぬかを圧縮した代替エネルギーやペレット関係の代替エネルギーの説明もありました。関心の高いところでもありますし、以前の分科会でもスギの間伐材を利用したペレットはどうかという話がありましたので、ぬかのような軽いものを圧縮すると非常に強いエネルギーになるという説明がありました。米の籾殻などを農家の人が共同して工場に持っていき、加工してもらい燃料として使われるという話もありましたし、こういったものの加工場の機械については１５００万円くらいの金額で設置されるという説明もあったのですが、地域内でストーブを作る工場を設置するとかすれば、大きな雇用の場になるのではないかと思います。今、現在どのような状況なのか、鶴岡市の森林文化都市構想とも関係ありますし、

代替エネルギーに関しても大きく取り上げていただけたらと思っております。

○ 田村勇次委員　前回、全国豊かな海づくり大会の話をしましたが、先日、平成２８年度に山形県での開催が決定したと新聞に出ていました。我々としても水産物が減少している中、鶴岡市もそうですが山形県としても、ヒラメやアワビの稚魚、稚貝を放流したりして、つくり育てる漁業を推進してきたことを、大会を通じて更なる漁業の推進、発展、これからの庄内の水産業の発展、活性化につながることを期待しています。これは漁業だけでなく内水面の漁業とか、観光面での経済効果が期待できると思います。それから、平成２６年に山形ディスティネーションキャンペーンというイベントがあるようです。水産業でも魚を獲ればいいという時代。また水産業は水産業、農業は農業というようなバラバラにやる時代は終ったとも思っています。観光などと連携しながら、山形県に、庄内にお客さんをたくさん呼んで、美味しいものや素晴らしい景観を満喫していただくイベントは大変いいことだと思います。

私は、漁業という視点になりますが、鶴岡には素晴らしい海岸があります。鶴岡市らしい、そして魅力ある漁村づくりとは何か。漁業、水産業をいかに再生するかが大きなテーマになってくると思います。山形県は全国から見ても海岸線が非常に短く、生産額もそんなに多くはないことと、さくらんぼや米といった農業県のイメージがある関係で、山形に海がないという認識の方もいるようです。庄内浜という素晴らしいものをいろいろな形で発信していきたいと思っております。庄内浜には港湾と漁港が１８あります。国と県が管轄の港湾が３つあり、地方港湾の加茂と鼠ヶ関、その他由良などいろいろな形で１５の漁港がありますが、酒田を除いて、鶴岡市には１４の港があります。それから、先ほどの農業と同じように、庄内浜の水揚げは昔の半分以下になっていますが、鶴岡市はそのうちの半分以上を占めています。また、県内の漁業者に限ってみれば鶴岡は酒田の倍くらいの水揚げがあります。このように素晴らしい港や水産業があるというところを、いかに伸ばしていくか、また、水産業も後継者不足と高齢化が進んでいることから、漁業者の定住も併せて漁村をつくっている方々、漁村に住む住民の定住も課題だと思います。

それから、水産業には多面的機能があります。これは国民の生命、財産を守るための機能。例えば、不審な船に対しての防人的な役目。海難事故があった場合、漁業者は自分の仕事を投げ打っても救助に向う。ボランティアの組織を作っていて海難救助の機能もあります。海岸線を守る作業もしています。生態系を保存する機能、魚食文化の継承、将来に向けての普及活動も漁業者の重要な役割としてやっていますが、ただ生産量、後継者不足や高齢化で漁業が衰退していく中で、そのような機能が失われていく懸念があるということで、危機感を持っているのが現状です。漁業は魚を獲るだけではない役目も持っているということで、国民の皆さんも分からないと思うのです。漁業者の方々が意識してやっているわけではないのですが、そういう役目も漁業者は持っていることを理解していただければと思います。

○ 三浦惇委員　町内会等のこともしていますので、最初にこの観点でお話しますが、町内会でも学区でも少子高齢化が非常に進んでおり、コミュニティや町内活動をどうすればいいのかが一つの大きな課題となっています。全体としては安定した職業、ある程度、余裕を持って活動ができる地域性、社会性がないと、今の時代は窮屈なのかと思います。地域に参加出来ないという状況は、共稼ぎや子どもを預かる場所などの関係で、社会環境の整備が伴っていない。また、雇用が安定しないと発展していかないということで、大きな課題として取

り上げ、市全体として進め方を議論していただければと思います。

観光の立場では、観光はサービス産業という位置づけで、第一次産業から第三次産業まで全てに関係した裾野の広い産業だということからすれば、観光都市鶴岡ということで、もっと助長していく必要があると思っています。定住人口プラス交流人口が全ての産業に影響してくる。鶴岡の自然、文化、歴史が非常に大きな強みを持っていますので、どう活かしていくかが課題になってくると思います。観光人口は平成２３年度は約５３０万人、前年が約５４０万人ですから１０万人ほど減っています。地震の関係で特に３月から５月の旅館業界は、風評被害のこともあり大変だったと聞いておりましたが、夏頃から段々取り戻した。地震だけでなく景気の動向もあったと思いますがこのような状況です。

それから、観光地間の競争が極めて厳しい状況となっておりますから、鶴岡としてもより効果的な方法で進めていかなければならない。ただ県全体では鶴岡市は山形市に次ぐ二番目の観光地になっていますから、今後どう生かすかということになります。そのためには観光地間の競争も重要ですが、鶴岡だけでなく、広域観光的に観光地と観光地をどう結び付けながら広めていくかを企画に据えて、イベント化されることが重要だと思っております。それからもう１つは体験観光。農業や漁業がありますが、地域産業を掘り起こしながら将来的な世代に広めて、またそれが大きくなって戻ってくるということで体験観光、修学旅行の受け入れも、これからの大きな課題だろうと思います。前回の審議会でもまだまだＰＲ不足ではないかとのことでしたが、私としては、行政も各地域の観光協会、施設の団体も一生懸命やっていると思います。それを鶴岡内での広域的な立場からどう進めていくかが、行政や観光連盟としての大きな役割ではないかと思います。それとインターネットによるものが大きいです。この辺の旅館、ホテルもインターネットを通して、かなりの数を誘客しているということですから、そういう形での力も入れていかなければならないと思います。それから市では観光大使などを任命して幅広くやっているようですが、そういう面での力も重要になってきますので、行政なり民間の市民としての受け入れ関係、心構えと言いますか、一体となって進める必要があると思います。観光業界は全ての分野に関わりますので、繋がりを持ちながら今後も進めていかなければならない。農業や漁業などと特色を生かしたものをどう結び付けていくのかが、これからの課題だと思います。

○ 奥山春名委員　住んでみて鶴岡の良さは感じていますが、その良さがまだまだ伝わっていない。知っていただけていない。地方のほうが子どもを育てやすいという都心部からの意見も含めて、是非鶴岡を盛り上げていきたいと思います。まず一つは、皆さんが知らないことを、日本の他の地域なのか、山形県内なのか、それを宣伝していく力を作るべきではないかと思います。デザインの仕事に携わっているので、広告宣伝に関して、もっと鶴岡が一体となった組織とつくる。メンバーやデザイナーなどをしている方に対する支援、産業関係の方たちと出会う場を設けるなどといったことが、とても大事なのではないかと思います。

私自身が鶴岡に来て一年が経ちましたが、まず、食べ物が新鮮で、それから子どもが日々過ごすには良い環境ですが、わざわざ行こうと思う方は少ないと思います。食べ物も食べてもらえれば絶対美味しい。畑をしていますが、遊びに来たお子さんが、いつもは食べない野菜が食べられたりすることに繋がるわけです。まず体験していただく機会をつくる。先ほど、体験観光という言葉も出ていましたが、鶴岡にもあればいいのではないかと思います。皓鶴亭さんのような場所がもっとあればと思いますが、経営も大変でしょうから、観光と絡めて

体験観光ツアーを企画するということも出来るかと思います。個々の産業などバラバラではなくて、何か一緒になって計画しないとなかなか伝わらないと思います。こちらに来る時に、他の県にも移住に対しての体制があるか尋ねました。定住をするための支援や場所、都会から来て農業や芸術活動をしながら地域の皆さんと楽しくやっているなどを、県や市でチラシにし、是非活用してくださいというよう案内がありました。鶴岡にはありませんでしたので、すぐ手渡せるようなものがあるといいと思います。一回皓鶴亭さんに泊まってみようとか、こんなに美味しいお魚は食べたことがなかったという経験をしていただく。新鮮なものを食べれば全然違いますので、東京でお魚が嫌いな子が、こちらのお魚を食べたら好きになると思いますし、お米も同じだと思います。親戚にお米を送ると随分贅沢していると言われた事があり、何かとても寂しい言葉だと思いました。こちらの方たちが普通に思っていることを伝えたり体験してもらうという場所を、たくさん作っていければと思います。

田川に住んでいて地域の交流もあり、皆さんにとても良くしていただいています。子どもを育てる環境として問題点はあるかと思いますが、私達は、核家族でおじいちゃん、おばあちゃん、周り親戚はいませんが、楽しく過すことが出来るのは、地域の皆さんの結束、子ども達を見守る気持ちがきちんとあるからだと思います。コミュニティをしっかり持つということは大事で、今回小学校が無くなってしまいますが、核家族でも、いろいろなことを教えてくれるおばあちゃんがいたり、親戚のようにしてくださる方がいて助けられているので、そういう場所があるということを、外の人たちや帰ってきて欲しい若い方に伝えて、可能性を広げていくという事は出来ると思いますので、そういうところに力を入れていけたらいいのかと思います。

○ 今野毅分科会長　皆さんから一通りご発言いただきましたが、このことはどうなのだろうとか何かありましたらお願いしますが、まず、私からお聞きしますが「育てる漁業」と言われて久しいです。それから、大震災で太平洋側のワカメやカキなど様々なものが壊滅的だけれども、水産資源を育てるという部分は少しずつ復活しているとのことですが、日本海側は冬の荒波やリアス式でないこともあるのでしょうが「育てる漁業」というのは、私も育てる場面にいますので、魚の稚魚を、三瀬小学校などの子ども達が海に放すとかあるようですが、例えば、海から水を汲んでは出来ないのでしょうか。いつかニュースで、どこかの山の中の温泉で塩分濃度が同じだということで、何かの魚を育てるというのを見ました。これは極端な話でしょうが、海の水を汲んで三瀬界隈で津波の来ないような施設で可能なのかどうか。もう一点は港、漁村も非常に大事だということも改めて思いましたし、防人的という言葉は非常にインパクトがあったと思いますが、漁村の活性化、漁村の持つ魅力をもっと出すにはどうすればいいのか、漁村あるいは漁港と言えば新鮮な魚がふんだんに安く食べられる。観光的なところで民宿は由良、三瀬にもあるかもしれませんが、１８の漁港のうち１４が鶴岡にあるのだという魅力の導き方、訴え方について、例えば、定住化という大きなテーマに向かう場合でもいいですし、現在の問題はこういうことがあるのだということも含めて教えていただければと思います。

○ 田村勇次委員　最初に栽培漁業ですが、おっしゃるように庄内浜は単調な海岸線で、冬には季節風が強く時化が多くて、養殖漁業というのは古来から発展してこなかったというのが事実であり将来的にも不可能です。現状ではアワビやヒラメをある程度のサイズまで、漁

協にも由良と酒田に中間育成施設がありますが、１ヶ月くらい餌をやって飼育しながら、少しでも生存率が高めて、ただコストは掛かりますので、いつまでも飼育は出来ないため、ある程度のところで放流しています。今はそういった事業がメインとなっていて、これについては県や鶴岡市からも助成いただいてやっていると言う状況です。ヒラメとアワビ、車海老を若干しています。陸上でというのは少し技術的に、それが出来れば皆さんやっていると思いますので、少し難しいのかと思います。ただ、県内の内陸の方でトラフグを養殖していると聞いたことがあります。今のところ海面養殖は難しいです。

○ **今野毅分科会長**　漁村の魅力を引き上げるには、どうしたらいいでしょうか。

○ **田村勇次委員**　観光でしょうか。漁業だけでは限界がありますので、奥山委員が言われたように、単独ではなく連携しながら魅力を引き出していくことが必要なのではないかと思います。そういった施設があれば是非とも利用したいと思います。

○ **今野毅分科会長**　漁村と定住化に何が必要なのかと考えると、単純に働く、稼げる場になると思います。何をしたらそういうことが出来るか。漁村というものをどう変えていけばとか、廃屋とか空き家があったら整備すればとか、なおかつ漁業を介して収入を得る。

○ **早坂剛会長**　観光に漁業を取り入れるにはどうすればよいでしょうか。例えば、農業が一般の方々に開放できない。規制がある。海もそうです。漁業権など規制があり、観光的なことになかなか利用できない。４７インターハイの時に、今のヨットハーバーはありませんでしたが、鼠ヶ関にはあれだけいい港があるのでヨット大会を誘致する運動をしました。他の県にお願いしていた関係で出来なかったのですが、東北高校の先生達と連携を取ったり、東京の大学からヨット部を連れて来たりしたのです。当時、漁業者の人は、何をしているのだと言う感じで見ているところもかなりありました。インターハイでも国体でもヨットハーバーを一度造ると、ヨットが好きな人が集まります。鼠ヶ関のヨットハーバーを見てもらうと分かりますが、内陸の人たちがかなりの船を持っています。週末に魚を食べながら船に乗りに来たりする。由良の白山島の辺りも綺麗になりましたし、加茂も港が空いている。そういうところをヨットの人たちに開放してあげれば、海岸の方に住みたいと思う人たちが来るのではないかと思います。そういう意味で、ある程度柔軟に考えながら受け入れる下地をもっと広げてもらえれば、大分違うような気がします。山形県に海なんてないと思っています。だから今度の海づくり大会はいいきっかけだと思うので、是非、山形県に海があるのだということを宣伝していきたいと思っています。

○ **奥山春名委員**　確かボディーボード発祥の地が鶴岡のどこかの海岸だと聞きましたが、そういうことなどを上手く宣伝に絡められたらと思います。水産関係について、新鮮なものを食べていただくことが、ここの一番の良さではありますが、例えば、缶詰などの加工品をきっかけに、庄内の海のものは美味いのだというのを知ってもらう。今回の震災で、石巻かのどこかでカキの養殖で運ぶのが大変なので、まず缶詰を作り時間をかけても届けられるということで、缶詰の加工を始めたのですが、缶詰だと味が落ちるというイメージがあるので、とにかく美味しいことを追求して作られたという話を聞きました。こだわりがあると目に留

めてもらうと思います。東京の人というか日本人は美味しいもの、お洒落なもの、格好いいものが大好きなので、注文して取り寄せたりすると思います。そういうことを工夫してみたらどうかと思います。

東京で枝豆というか茶豆は食べませんが、自分の畑で作った茶豆を父に送ったら、すごく美味しいと言ってました。こちらと向こうでは豆一つをとっても全然違います。何かきっかけをということでお話させていただきました。

○ **今野毅分科会長**　農協は集落に農業者が住んでいる地域関係で、集落と農協はすごく密接なコミュニティを含めて関係しています。漁協さんは漁村、集落との関係はどうでしょうか。例えば、町内会自治組織と漁協との関係。漁業者との関係があるのは分かりますが。

○ **田村勇次委員**　漁業者、組合員が高齢化している中で、昔と違って「おじいちゃん漁協だよ」という状況です。若い人たちの漁協離れがあります。

○ **今野毅分科会長**　先ほど早坂会長のお話でなるほどと思ったことは、農業には農地に関していろいろな規制や農地保有がある。漁業をする場合にも漁業権という規制、権利があるやに聞いた事がある。農業の場合は、誰かが農業をしたいという場合は出来るのですが、漁業の場合、例えば、食堂をしていて自分が捕まえた魚を食べさせるということは簡単に出来ない。漁業権というのは財産権のようなものですか。

○ **田村勇次委員**　共同漁業権というのがあり、山形県漁業組合が県知事から許可もらい管理しています。その中ではアワビ獲ったり、沿岸で船を持たないで貝を獲ったりする人でも権利を持たないとだめです。

○ **今野毅分科会長**　漁業をやりたいと言う人がいた場合には。

○ **田村勇次委員**　加入は自由ですので、組合員になっていただく。

○ **五十嵐吉右衛門委員**　海岸地帯は本当に観光客がいっぱいです。夏のシーズン期間は殺到しています。内陸、県外からも観光客が来る中であまり規制が強く出ると、観光にもあまりいいイメージを与えないのかと思います。その辺を緩和できないでしょうか。

○ **早坂剛会長**　港の管理はどこでしているのですか。

○ **田村勇次委員**　港の管理はそれぞれの管轄の行政です。例えば三瀬とか油戸とかは鶴岡市で管理していますし、由良などは県が管理しています。

○ **三浦惇委員**　この間加茂に行ったら、卸市場が全部由良だということで驚きました。

○ **田村勇次委員**　昔はそれぞれの漁港にありましたが、なかなか買受人も少なくなり、市場統合で３ヶ所になりました。

○ **今野毅分科会長**　漁獲量が少ないのはあるかも知れませんが、これといった何かが作れないのかと思っていました。今回の震災でつくづく六次産業化ということを思いましたがどうでしょうか。

○ **田村勇次委員**　六次産業化と言われますが、水産業はどうしても割合が少ないのです。

○ **今野毅分科会長**　先ほど体験観光という話がありましたが、こんなことがあったら住みやすくなる。興味を持って来てくれる。ＰＲやつながりなどがあればお願いします。

○ **三浦惇委員**　観光であれば漁業の方は善宝寺に来ますので、上手く連携が取れればと思います。それからヨットを持っている方があちらこちらから来ていますので、港の管轄をもう少し統一的に出来たらいいのではないかと思います。それと鮎釣りで、鼠ヶ関や温海、赤川に群馬、埼玉など、かなり他の県から来ています。水の流れが不安定だったり水温の関係があるようですが、群馬にもいいところがあるのではないかと聞くと、こちらは空気がおいしく水もきれい。山の緑もいい。そしてどこかの温泉に一泊して帰る。その辺でもっと活かすところがあるのではないかと思います。一体となった進め方をしていかないと、それぞれの地域に任せっぱなしでは限界を感じます。

○ **早坂剛会長**　山林も７０％ありますので観光に結び付けられないでしょうか。

○ **五十嵐吉右衛門委員**　そこを盛り上げながら、この資源を有効的に活用して雇用に結び付けるか。若干の設備投資も必要かもしれません。鶴岡の活性化のために地域の方からも聞きながらやっていかなければと考えます。森林組合が二つあります。切磋琢磨し将来的なことも考えながら、地域内を活性化していくことが大事だと思います。先ほど農業、漁業でも話がありましたが、林業も同じで、高齢化で集落が崩壊する。私も農業やっていたので、その点も改革しながら一歩一歩前進していかなければと思います。

○ **早坂剛会長**　都会から移住してもらう場合、海、山、里はすごく魅力的だと思います。そこを地元の人が分かっていない。活かそうとしないのが一の番問題だと思います。

○ **今野毅分科会長**　もっと活性化するためには人がいなければだめです。ここで商売するとか、資源を活かす。商工業との連携、組合でも六次産業化といわれますが、どのような目線や考え方がいいでしょうか。

○ **奥山春名委員**　会津若松から来たのですが、被災地として取り上げられるような場所ではありませんでしたが、心配される親御さんは多く、向こうにいる子ども達を連れてきてあげたいと思っていました。こちらに来た時、空き家が多く、中には蔵のように使われているご家庭もあるのですが、放置されていて地元の人に管理してもらう。持ち主がこちらにいないという場所が多いです。そういう場所を使い、皓鶴亭のように炊事洗濯は自分でやるという形で整え、低価格で泊まりに来ることが出来るようにする。そして、ＪＡさんの美味しい野菜を安価な価格で料理をしたり、新鮮なお魚を食べてもらう機会を作る。山林についても

子どもの山遊びみたいなことを取り入れ、被災地から遊びに来るだけでなく、体験として他から遊びに来がてら美味しいものを食べて過ごす、そして庄内のことを少し勉強するようなプチスクールみたいなツアーを作れば、お野菜もお米も空気も山の風景も知ってもらえると思いました。来た当初は、知っているご家族たちに、そのような場所を借りられるようなことが出来たらいいと思いました。

自分も絵を描いたり子どもに教えたりしてきたことからも、何かのイベントの一つとして、例えば、庄内のお魚や自然を見て絵を描いてみるという、創作的な体験などが出来たらいいかと思います。

○ 今野毅分科会長　暮らしていくために収入を維持しようというか、新しく生み出そうとか、働く場を見つけるという点では、どのようなスタイルでやればいいでしょうか。

○ 奥山春名委員　私達は自分達がしてきたことを活かした仕事をしたいということもあって、こちらに来ました。宣伝の細長い旗がありますが、一時的なイベントではいいかもしれませんが、日常的なのぼり旗のデザインを工夫する、専門の人に頼む、カラーリングの統一を図るということも、観光や地域の活性化という面で大事だと思います。湯田川で、月に 1 回朝ミュージアムというのがあり、小さなバス停で、湯田川の温泉のことや作物など小さい展示で紹介しています。若い方が一生懸命されていて、その一環でしょうか。温泉のマークと鷺の鳥の絵がきれいにデザインされた旗があります。強くない色合いで作ったり工夫することで、おしゃれに見えます。自分達でＴシャツをデザインして作るといった、ちょっとした工夫で観光に来た方にも、頑張っているとかいい感じだと思わせる良さ、要素はあると思います。今あまりデザインの需要が庄内にはないと思いますので、その辺は是非アーティストもいっぱいいますし、デザイナーがどれくらい活躍されているかは分かりませんが、先日、道形保育園のサイン計画をさせていただきましたけど、そういうことをやりたいと思っている方がいます。そういう仕事があるということを宣伝したいし、自分でもやっていきたいし、産業の部分で関わりたいと思っております。

○ 今野毅分科会長　今日はそれぞれの分野、また、いろいろな立場で自由に話をしていただきました。この次は、定住化に向けた具体的な話をしていきたいと思いますので、今日の話を踏まえてお願いします。漠然としたものを、いかに形として作るかというのは大変な作業ですので、皆さんのご理解とご協力をお願いします。

３．全体会（午後３時３０分）　進行：三浦総一郎地域振興課長
＜あいさつ＞　早坂剛会長

（１）分科会毎での協議内容報告（議長：早坂剛会長）

○ **早坂剛会長**　分科会での話し合いについて報告をお願いします。地域コミュニティと産業経済の二つの分科会ですが、最初に地域コミュニティ分科会の山田分科会長さんからお願いします。

○ **山田登分科会長**　分科会のテーマをどうするかということで話し合いを進めました。まず、少子高齢化、それに伴って鶴岡市の人口が年々減っているが、高齢者が亡くなるだけではなく、子どもの数が年々減少しているからなのか。あるいは、就職や大学進学で戻ってこないことが原因なのかということが話題になりました。人口減少に伴って空き家、空き地が増加していますが、管理関係で問題が出ていること。それから、高齢者は地域で支え合っていかなければならないが、高齢者に対する支援活動を活発にしていく中で、人と人との絆を大切にした地域活動のあり方、「おだがいさまのまちづくり」は前から言われておりますので、そのことをメインに地域活動をこれからも推進する必要がある。また、この地域に、住んでよかった、幸せであったという気持ちを持ち誇りに思える地域には、やはり高齢者、大人から、幼稚園も含めた子どもまで、町のいろいろな行事に皆が参加できる体制づくりが大事である。そして、仕組みづくりには、リーダーの育成やコーディネーターの発掘を考えなければならない。また、災害や大震災に備えて、町内の安心・安全を図るため、防災についても取り組まなければならないなど、いろいろ出ましたが、総合すると、コミュニティの活性化という大テーマの中で、いろいろな視点を設けてまとめていく。ひとつには、この地域で育って良かったという自信を持って、子ども達に地域の正しい文化を伝えるという視点。コミュニティを活性化するには、一つの自治組織の中にもいろいろの団体がありますので、他の団体との横の連携を大切にしながら組織の活性化を図る。活動の中身は、絆を大事にし、支え合い、そういう地域社会をつくっていく必要があるではないか、そして活動が充実した楽しいもの仕組むということです。人口が少なくなり、なかなか元に戻らないのだとすれば、少ない人口の中で幸せな生活が出来るようにするには、どういうものがあるかも分析をしながら、人口が少なくても、経済的に豊かで幸せな生活が出来るまちづくりがどうあればいいかということも、真剣に考えていく必要があるのではないかいうことで更に検討を進めるということです。それから、昔は大勢子どもがいて、子ども同士が切磋琢磨し、また、おじいちゃん、おばあちゃんから、いろいろ世の中のことを教えてもらいながら、ある程度健全に育っていったのですが、最近は、子育てについて悩みの多い時代になってきているので、そういう面からも、地域が一体となった子育てが出来るようなことも考えなければならないということも話題になりました。

○ **今野毅分科会長**　メンバーが９名中６名の出席で全て網羅できませんでしたが、農業、水産業、林業、観光、商工といった各産業界での、まず現状の意見交換をして、その中からテーマを見い出していくということで話をいたしました。まず、私からは農業の様々な話をさせていただきました。早坂会長からは、地域の産業の状況等と人口減少と産業についての

お話。田村委員から山形県の水産業、漁業の現場について、平成２８年度に全国豊かな海づくり大会が山形県で開催することが決定したということで、山形県の海岸線は全国的にも短いそうですが、その中で１８の漁港、港湾があり、うち１４は鶴岡市にあるということです。漁業も農業も含め全体的なことですが、一次産業が非常に後継者、担い手不足、高齢化など状況が同じ中で、この恵まれた海資源というものを、２８年度の大会を通じて、どのように豊かなものに価値観を変えていくかという問題を提起していただきました。美味しい魚、いかに食資源を生かすかということを含めての話がありました。林業では五十嵐委員から、鶴岡市の東北一の面積で７割が山林であることの活用の仕方、森林資源をどう生かすか。早坂会長からも観光的に資源をどう転嫁する部分があるのかという話もありました。三浦委員から、鶴岡全体と各産業の部分とどのように有機的に結びつけていくかという、体験的なものを定住化に向けた、ネットワーク、仕組み、システムづくりが必要なのではないかという話がありました。奥山委員は会津若松からご家族で鶴岡に来られ、住んでおられるということで、我々鶴岡人では持ち得ない客観的な視点で、この鶴岡というものを話していただきました。定住化というテーマをしてみたいという私の提案に対して、なぜこんなに、素晴らしい資源がたくさんあるのに、結びつかないのだろうという話をいただきました。鶴岡は非常に恵まれた資源があるところだということですから、今後、定住化の促進に向けて練り上げていきたいと思ったところです。山田分科会長からも人口減少に伴っての話がありましたが、早坂会長からは、この少子高齢化という人口減少の中での出生率の話が出ました。２１００年には日本の人口が４８００万人に減る。都会では子育てをする環境が厳しく、地方のほうが子育てしやすいから地方に住まなければという講演を聴いてきたということで、鶴岡は子どもを育てる環境としてはいい地域なので、鶴岡の良さを、子育ての良さ、住みやすさといったようなところを、もっと特色を出す、訴えるようなものを、我々は定住化ということに結び付けていきたいという話がでました。定住化のためには雇用という収入の確保の場について、各産業がもっと連携をとりながら、様々の仕組みの中に取組んでいける提言を、最終的にまとめられたらと思います。おそらくコミュニティの部分も同じで共通項はあると思います。

○ 早坂剛会長　どうもありがとうございました。これからの展望や、このようにしたいなどがあればお願いします。今後の進め方についてでも構いません。菅原委員お願いします。

○ 菅原衛委員　地域コミュニティ分科会ですが、先輩方のお話しをお聞きし大変勉強になりました。コミュニティもいろいろな枠組みがあると思います。どのような枠組みにするのか、これから絞り込んでいくわけですが、２年間という長いようで短い中で目に見える結果にしたいと思います。

○ 早坂剛会長　もう少し時間がありますので、竹田委員お願いします。

○ 竹田理英委員　子どもが少なくなり、少子化そして高齢者が多いことは、鶴岡だけではない全国どこでも同じ状況かと思います。分科会でも、そうだ子どもがいないと思いましたが、今ふと思いまして、それは、私の住んでいる町ではペットを飼っている方が多いということです。犬の散歩で結構いろいろな方とコミュニケーションが取れるようになりました。

家でも飼っていますので、例えばチワ子ちゃんのお父さんとか、犬を飼っている方とのコミュニケーションが取れるようになりました。人が集まればコミュニケーションが生まれ、コミュニティが生まれる。この間の大産業まつりもすごい人だったと聞きました。リーダーを上手くつくれば人も集るし、コミュニケーションも出来る。リーダーという人を役所やいろいろな団体の方が発掘していくのが必要でないのかということを思いました。

○ 奥山春名委員　竹田委員が言われたことを受けて、鶴岡に来て一年ですが、人と人が近いといいますか、狭いとは思いませんが、人のつながりをすごく温かく感じております。人と人がとてもつながった場所なので、先ほど出たシステムを上手くつくれば、もっとしっかりつながると思います。このシステムづくりのようなことを、皆さんと意見を出し合っていければと思います。

○ 齋藤春子委員　２０年前にコミュニティの理事ということで婦人会の代表になりましたが、コミュニティの中身が未だに変わっていません。地域が少子化、それから年寄りが多い中で、地域の中でコミュニティではなくコミュニケーションが図れる場を考えたらどうかと申し上げました。コミュニティのやり方が何十年経っても同じだということです。コミュニティのリーダーがするのではなく、地域の人たちが地域の皆を巻き込んで、つながりを持つ、皆が楽しむ会を考えたらどうか。一番大事な人と人のつながりが少子化ということに押されて、益々薄くなっているのかなと。だからその辺に力を入れるには、何を考えていったらいいのかということを考えてもらいたいと思っております。

○ 早坂剛会長　もっと皆さんの意見を伺いたいのですが、その意見は次回にお願いすることにしまして、今日は次回からの方向性が見えてきたのかと思います。少子高齢化という状況は変わらず、人口減少は避けて通れません。山田分科会長からありましたが、人口が減っても地域が小さくなっても、そこに住んでいる人たちが誇れる、良かったという地域づくりが大事なのだということです。それを支えていく環境、例えば、自然、山林、漁業、農業、食などの環境整備もあるでしょうし、生活を支える安定的な雇用の場を、どのように維持していくかということが、これからの定住人口を安定させていくことに繋がる。新たな人たちに、この鶴岡に住みたいと思わせるにはどうすればいいのかが、これからの我々の課題だと思います。少しでもこの地域がよくなり元気づき、そして、鶴岡に行ってみたいと皆が思えるような鶴岡にしていく。それには地元に住んでいる人たちの考え方、価値観を、これだけいいところ住んでいるのだということを、まずもって自分たちが認識をするということが大事だと思います。我々の課題になっているコミュニティについて、いろんな分野を通して、強い点、弱い点を出し合いながら改善していくことが、この２年間のテーマだと思いますので、是非その辺りを目標にしながらやっていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

７　その他　　なし

８　閉　会　（午後４時０５分）　（三浦総一郎地域振興課長）